

最優秀賞

ふれあい賞

社会の一員として支えたい

伊勢原市立伊勢原中学校

三年 長谷川 千 絢

部活を終え夕暮れ時に帰宅している時だった。交差点から一人で歩いていたら私は、前の方の高齢の小柄な女性が独り、私の方に向かって歩いて来る姿を見つけた。夕暮れにしてもまだまだ蒸し暑い季節だったが、その女性は、季節に似つかわしくないニットの着にウールの帽子を被られていた。

ゆっくりと、でもはつきりと私の方を見て何か話されている。やがて私は会話を交わせる距離まで近づいた。

立ち止まった私に向かって、その女性は、この辺りでは聞いたことの無い駅名を言い、駅はどこかと言われた。近づいてから気付いたがその女性の靴はどう見てもサイズの大きい男性用の物をひっかけるように履かれていた。何か違うと私は感じていた。

私は何から話そうか迷った。この状況は、介護のテレビ番組を見た時、認知症の高齢者が、独り道に迷っている場面を再現しどう対応するかを伝える内容の回があり、その内容と似ていたのだ。目線を合わせてゆっくり話しかけようとか、出来るだけ否定しないように聞こうとか気持ちに寄りそった言葉掛けをしようなど、思っているけど、急には出てこなかった。実際行動に移すのは案外難しい。

困っていたところ、帰宅途中の大人の方が状況を察して、私に代わって女性の話を聞き携帯から警察に連絡を下さった。

新聞で認知症の行方不明者は年間一万七千人を超えると書いてあった。私の住んでいる自治体では防災行政用無線を使って依頼のあった行方不明者についての放送は随時されており、このことは日々身近で起きている事なのだと思った。

介護のテレビ番組を見ていたのは高齢者福祉施設で働く母の影響だった。特に興味がある訳ではなかったが小学校低学年頃まで母の職場について行く事があり、なんとなく見ていた。

母に下校途中にあった出来事を話した所、認知症サポーターについての話と、そのことについて過去の新聞記事を見せられた。認知症サポーターとは、認知症について正しく理解し、偏見を持たず地域で認知症の人やその家族を温かく見守り、気持ちを理解し、出来る範囲で手助けする事が出来るよう受講し養成されるもので、大人でなくても受講出来るとのことだった。母の話では日常的に家族や仕事で支援者として関わっていても、なかなか正しく理解し接することは難しく丁寧に接する事が難しくなる時もある。どんな人にも受講の意義があるし、人口の高齢化が加速して支える人が減る一方の現代、家族や介護施設だけでは支えきれなくなってしまう。社会全体で支えていけるように、普段あまり接する機会がない人が受講する機会が増える事はもちろん良いと思う、と話していた。私は新聞記事であったような学校での出張認知症サポーターの講座があれば、これからの高齢化社会を担う私達の知識の一つとして不可欠なものになるのではと思った。

現代、ネット社会となり顔認証システムを用いたネットワークカメラの普及などシステム設置や設備の普及も多く進んでいるとの事だ。居場所認証も出来れば探しやすくなると思う。ただ、機械がどんどん普及していても、私が下校時に出会った駅を探していた高齢の女性の方に対応して下さった方の様に人が関わらないと助からない場合もあると思う。私も知識を行動に移せる、社会の一員として成長したいと思う。